二〇〇〇年十二月十二日 第三種郵便物承認 毎月（1・2・3・4・5・6・7・8の日）発行 発行人 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町二の二 東興ビル4F

KSKS ゆいゆい通信

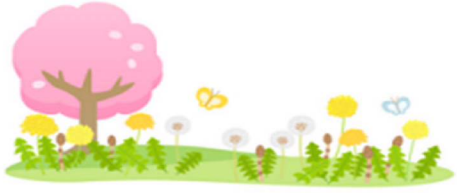
No.118 22.4.28

編集人 社会福祉法人 寧楽ゆいの会
〒631-0823 奈良市西大寺国見町3-5-5
TEL/FAX 0742-41-6039
URL http://narayuinokai.or.jp

定価 1部50円
年間 300円

◆法人からの報告
「役に立っている？私たちの支援」
理事 六十谷 尚美 …1
◆News
◇ひきこもり居場所づくり
◇二名圏域相談ネットワーク …2
◆Reports
◇ひまわりオンライン交流会 …3
◆Reports
さわやぎ／ぽすと …4
きらく舎／こもれび生訓 …5
こもれび就労／D-PORT …6
◆Information
2022年度職員配置 …7
新人職員紹介 …8

役に立っている？私たちの支援 事業の見直し継続



春が来ました。別れの春、出会いの春。

3月から4月にかけ「出会いと別れの季節だなあ」としみじみ思うことが多かったように思います。さみしい別れもうれしい別れもありましたが、「人生に別れはつきもの」と気持ちを切り替えやすいのも、この時期だからなのかもしれません。今年度も前を向いて進んでいける1年になるように願っています。

2022年度、ゆいの会は昨年度に引き続き、事業の見直しを進めます。利用者の高齢化と、新規利用者の減少から、事業やその活動内容の転換が必要になっているからです。

通所事業に高齢者向けのサービスも加えてはどうか、個別支援は手厚いが運営が苦しい訪問系サービスをどうしていくのか、相談支援はソーシャルワークの核となる事業だが、安定して継続していくにはどうしたらいいのか・・・。など考えることはたくさんあります。

事業の方向を定めるために現在の状況を振り返って、「利用者さんの日々の暮らしや人生の中で、私たちの支援はどのくらい役に立っているのか」「安心や楽しさを感じてもらう場にできているだろうか」と考えた時に、自分たちの支援だけではどうにもならないという場合がたくさんあることも見えてきました。高齢期の人の心身の変化に伴う生活課題への支援は、障がい福祉サービスだけでは十分ではなく、包括支援センターと連携することで提供できる支援の幅が広がることがあります。また最近では、ひきこもりの相談にはRestartならと連携することが増えてきています。場合によっては、教育機関に相談することもあります。制度の隙間にいる人に支援を届けること、他の機関やサービスと連携して支援を組み立てることは高齢化や障がいの多様化によってますます必要になっています。

今年度の法人の方針としては他に、

・「こころの講演会」も含めた広報啓発や地域とのつながりづくりの方法について検討する
・災害等非常時の体制確保
・虐待防止委員会・身体拘束適正化委員会(2022年度から設置義務)について、具体的な体制を検討する
・職員研修に力を入れる などを掲げています。

（六十谷尚美）

News

NPO法人ふぁ～ちぇ
～枠に捉われない居場所の創造～

『NPO法人ふぁ～ちぇ（以下ふぁ～ちぇ）』が運営する障害福祉サービス事業所では現在、ひきこもりの人が居場所として利用し始めています。障害福祉サービスは障害者手帳、もしくは精神科への継続した通院（主治医の意見書）がないと、利用対象となりません。そこでふぁ～ちぇでは、奈良市若者サポートセンター「Restartなら（リスなら）」（2021年4月号参照）と協働し、障がいの有無にかかわらず、ひきこもりの人が利用できる居場所づくりを始めました。

「ゆっくりできる場所」をキーワードに自分たちも過ごしてみながら、物の配置、運営側の関わり方などを検討しています。メンバーの中には「地域に貢献したい」「何か役割が欲しい」という人もいます。「自身の経験を活かして運営に携わることで自信を持ってもらいたい」とスタッフの上原丈英さんは話します。居場所の大切さや過ごし方を知っているメンバーが、この取り組みに大きな力を発揮します。

▶ゆっくりできる？自分たちで体験中。

ひきこもりの人への支援は、支援者側の価値観で本人を無理に引っ張り出そうとするのではなく、不安や思いを聞き、対話を重ねながら、本人の希望に伴走していくことが大切とされています。しかし、家から一歩踏み出したいと思えても利用できる場所やサービスは少ないのが現状です。

上原さんは「自分が過ごしやすいように過ごせ、家以外に安心できる場所の一つとなっていけたら。まず来てみて、通うことで自然とコミュニケーションが生まれたり、笑顔が増えたりと、変化できる場所になれば」と話します。奈良市社会福祉協議会が運営する『鳥見デイサービスセンターふらっと』のスペースを活用し、令和4年5月10日から毎週火曜日の14～16時まで居場所を提供する予定です。

（宮崎涼真）

支え合って支援を届けよう～二名圏域ネットワーク～

奈良市西部の二名包括圏域（鶴舞・青和・二名・富雄北）に相談支援や生活支援を行なう事業者同士が相談し合えるネットワークができました。

◆支援者も悩んでいる…！

「障がいは相談支援に担当の地区分けがなく、相談先がわからない」「委託相談支援事業所（以下「委託相支」）と指定相談支援事業所の違いは？」などの疑問の声がきっかけです。

元々あった奈良市社会福祉協議会と二名地域包括支援センターのネットワークに障がいの委託相支が入れば、地域の相談はほぼ受けられると意見がまとまり、現在は地域子育て支援センターも加わり様々な課題を検討できるようになりました。地域ケア会議（※）の仕組みを使って支援者が困りごとを相談できる場を作り、一緒に支援方法や支援機関を検討します。

これまで地域からの相談は、包括支援センターに分野を問わず寄せられる傾向がありました。二名地域包括支援センターの柳川剛秀さんは「専門外の相談へのスムーズな支援が難しく、外部機関との連携は相談員の経験値の違いで差があるのが課題だった」と言います。地域からの相談は、これまで通り事業者それぞれで受けますが、今後は相談を受けた人が専門的な支援機関にスムーズにつなげたり、支援の中での困りごとを相談しやすくなったりします。ネットワークの活用により、均一的な支援を提供できるだけでなく、支援者のマンパワー不足の一助となることも期待されます。

◆ともに考えることで「できる」を

またネットワークでは、住まい探しやひきこもりなど制度の狭間にある課題の検討のほか、民生委員や弁護士、不動産仲介業者などともネットワークを組み、互いに活用できる資源としていく予定です。

奈良市社会福祉協議会の大西真葵さんは「誰かに相談するだけで解決することはたくさんある。誰もが活用できるような仕組みができ、支援者それぞれが支援に関わる心のハードルを下げられたら」と話します。

（慶伊里衣子）

※包括支援センターなどが主催。①個別課題の解決②地域課題の発見③ネットワークの構築④地域づくり・資源開発⑤政策形成　の機能を持つ。

Reports

ついに実現！ ひまわりオンライン交流会

新型コロナウイルスの蔓延、感染防止対策のために途絶えていた、「ひまわり」と精神科病院との交流会がオンラインで再開されました。2月15日（火）の午後、いつも実行委員会をしている貸しスペース「ナラリーベース」と社会医療法人平和会吉田病院C病棟（療養病棟）をZoomでつなぎました。ナラリーベースではメンバー5人、スタッフ4人、病棟では入院者17人、スタッフ8人が参加し「曲名当てゲーム」と合唱を楽しみました。

◀最後はピアノ伴奏のもと「なごり雪」を合唱

◆コロナで途絶えた交流会…

2007年から活動を続けている「ひまわり」。地域の事業所の垣根を越え、有志メンバーとスタッフが奈良市内の吉田病院、五条山病院の入院者・医療従事者との交流や啓発活動を毎年続けていましたが、コロナ禍となり、病院を訪問しての交流が途絶えていました。

2ヵ月に1回の実行委員会では「病棟に入れなくてもできる活動って何だろう？」と検討を重ね、ひまわりの活動を知ってもらうための啓発ポスターを作って病棟に貼ってもらったり、2020年度末からはひまわりメンバーの暮らしや利用している事業所を知ってもらうための新聞「ひまわり新聞」を3ヵ月に1回発行し、入院者に見てもらったりしていました。

一方、委員会では「顔見知りになった入院者の人はどうしているかな？」「やっぱり交流がしたい」という声はずっとあり、直接会わない交流の方法も探り続けていました。

◆慣れない画面越しで楽しんでもらうには？

スタッフや、メンバーの中でも会議などでZoomを使う経験が増えてきた頃、「交流会もZoomでやってみれるんじゃない？」という意見が出ました。病院側のOKも取れました。

交流会の企画内容はひまわりに任されます。2年ぶりの交流会。「会えない間も忘れてなかったよ。これからもよろしくね」「病棟外にも関心を持ってね」 伝えたいことはたくさんですが、今回は、ともに過ごすひと時を楽しみ、つながりを感じてもらうことを大切に企画しました。

「オンラインでやりとりするのはきっと初めてだろうから、わかりやすいゲームがいいかな？」「音や映像はリアルタイムでちゃんと伝わるのかな？」初めてのオンライン形式に懸念がたくさんある中、ビンゴ、じゃんけん大会、地域のお店や自分たちが通っている事業所の紹介をする、ゆるスポーツなどたくさんの案を出し合いました。

内容が決まってからは、挨拶、司会、キーボード演奏、合唱の伴奏者、タイムキーパー、音声不良時のサイン係をひまわりメンバーで役割分担しました。

◆試行錯誤の結果、当日は…

せっかくの機会。失敗のないように、インターネット環境、音声、画像の確認のため本番までに2回、実行委員会側の会場と病棟をつないだテストもしました。「音声が途切れる」「キーボードの高い音が聞こえない」「マスクをしているから、画面の向こうでしゃべっているのかどうかわからない」…課題はたくさんありましたが、病院のシステムエンジニアにも協力してもらい、1つずつクリアしていきました。

当日のメインイベント「曲名当てクイズ」では地域メンバーがキーボードで「つぐない」「高校三年生」といった往年の名曲をワンフレーズ弾き、病院では入院者が4チームに分かれ、回答をフリップに書きます。全6曲の勝負で全問正解2チームと熾烈な優勝争いとなり、最後はじゃんけんで決着が着きました。優勝チームにはひまわりにも参加しているNPO法人ふぁ～ちぇの商品、革細工のストラップが贈られました。

直接入院者や医療従事者には会えませんでしたが、地域の風を病院に運ぶことを目的とした交流会は、再開の一歩を踏み出しました。ひまわりメンバーからは「オンラインでも意外と意思疎通がスムーズにできた。これなら、今後ももっといろんなことができそう」「久しぶりに顔を見れた人がいた。こちらを覚えていてくれたみたいで嬉しかった」、病院側からは「離れていても合唱で一体感が感じられて感動した」「病棟生活の良い刺激になり曲名当てクイズも楽しかった」という感想がありました。

（佐野雅実）